

メディア私評 2020年1月9日

【本文】

「トナカイは、小馬ほどもある大きなもので、そのからだは、雪もおよばないくらい白く、枝角には金がぬってあるものですから、のぼる朝日の光をうけて、火のようにかがやいていました」児童文学の代表作のひとつ、ナルニア国物語全7巻の「ライオンと魔女」(C・S・ルイス作、瀬田貞二訳)の一節である。かつては小学校の図書館で人気だったシリーズだ。

改めて読み返すと、意外に難しい。まず、一文が長い(84文字)。「枝角」を除けば、語彙はさほど難しくはない。だが、注目すべきは助詞など文の機能を支える言い回しの難しさだ。「ほどもある」「およばないくらい」「ものですから」「のぼる～をうけて」などの言い回しは、日常会話では滅多に使わない。しっかり読まないと、かがやいていたのが「トナカイ」なのか「枝角」なのか判然としない。

私が所長を務める「教育のための科学研究所」では、文章や図表の意味をどれだけ正確に理解できるかを診断する「リーディングスキルテスト(汎用的読解力調査)」という調査を行っている。実はそこでも、「以外の」「必ずしも～ではない」「とりわけ」など、学習する上で必要な言い回しを誤読したり読み飛ばしたりする生徒が目立つ。調査結果から察するに、代表的な児童文学の多くが、今の日本の小学生には残念ながら難しすぎるだろう。

OECD(経済協力開発機構)が15歳を対象に3年ごとに実施する、国際的な学習到達度調査「PISA(ピサ)」の結果が先日公表された。日本は数学・科学リテラシーで辛くもトップグループに留まったが、読解力は前回に続き順位を下げた。各紙の見出しは、「日本『読解力』急落15位(読売新聞)」と順位降下をセンセーショナルに伝えるものと、そのショックから「教育のICT対応遅れ(朝日新聞)」や「本読まずスマホ没頭(毎日新聞)」等、犯人捜しに走ったものに大別されたようだ(東京本社版12月4日朝刊)。

整理してみよう。PISAでは生徒のICT活用の度合いも調べており、確かに日本の高校のICT活用はECDで突出して低い。しかし、PISAの調査対象は高校入学間もない高校1年生。ICT対応遅れが犯人というなら、小中学校でのICT活用の度合いを国際比較する必要がある。だが、そのデータは乏しい。さらに、数学リテラシーや科学リテラシーが顕著に落ちない説明がつかない。ICT犯人説は拙速だろう。また、青少年がSNSに耽溺するのは、先進国共通の悩みであって、日本固有の問題ではない。

私が今回注目したのは、アメリカの順位だった。13位。20年前の調査開始以来、初めて日本はアメリカ以下に落ちたということだ。移民大国アメリカには、両親が英語母語話者ではない、という生徒も多い。経済格差・地域格差も激しい。ただ、だからこそ、だろう。アメリカには「英語は母語なのだから、自然に身につく」という先入観がない。多様な背景の生徒に対して、学習に必要な英語を体系的・段階的に身につけさせるカリキュラムの研究が盛んだ。加えて、そのカリキュラムの実践や教員の養成に対して、多くの予算が投じられてきた。一方、日本は、移民が少ないことや、「一億総中流」といわれるくらい同質性が高かったことから、学習スキルとして国語を身につけさせる体系的カリキュラムを編む発想が極めて乏しかった。

「定義を読んで理解する」「記述式試験の答え合わせをする」「口頭の指示をメモする」「提示された図や写真について、100字程度で正確に描写する」——そんなことは誰でも自然にできる、と思ったのが、まさに日本の教育の盲点であり、怠慢だった。現場に来ればわかる。その「当たり前のこと」が小学生だけではなく、大学生もできない。

実は教育政策においては、新しいことを学ばせるより、「自然」や「前提」が崩壊したときの対応の方が圧倒的に難しい。プログラミング教育は、誰にとっても新しいことだから、「プログラミングとは何か」や「どうやって身につけるか」の工程が明確だ。一方、大人である私たちが意識せずに自然に身につけてきたことを、子どもたちができない場合、大人はパニックに陥る。「どうして、そんな当たり前のことができないの?」「どうして、もっと本や新聞を読まないの?」と。

だが、子どもたちを責める前に、立ち止まって考えてみよう。彼らは、読まないのではなく、むしろ読めないのかもしれない。我々大人世代と子供世代では、取り巻く言語環境が激変した。その影響を低く見積もり、国語は「国語」であるがゆえに、自然に身につくと侮った私たち大人の怠慢こそが責められるべきではないか。

【左上別稿】

自動翻訳が格段に進歩した。「でも、必ず間違える」(隅田英一郎氏談、本紙12月6日夕刊「進む自動翻訳、だから勉強」)。記事は、英語に翻訳したものを日本語に逆翻訳し、意味が変わっていないかを確認することを薦める。

タレントの滝沢カレンさんの唐揚げレシピが、個性的で面白いと話題になった。「まず、透明度まではいかないがスーパーでよく見かけるしもらうしなの、ビニール袋を二重にします」。グーグル翻訳で逆翻訳してみた。「まず第一に、私は透明に行きませんが、私はしばしばスーパーマーケットでそれを見るので、ビニール袋を2倍にします」。意味をなさない。統計と確率をベースにしたAIは、外れ値の処理には失敗する。実は私の声も正しく音声認識されないことが頻繁にある。多様な人間を疎外しないことを、AI利用の一つの条件としたい。